



ガーデンシティ健診プラザがある福岡大名ガーデンシティ外観。同ビルは、高級ホテルやワンフロアの専有面積が2,500㎡以上のオフィススペースなどを提供するなど、世界や地域との多様な交流拠点として2023年6月にオープン。

# ガーデンシティ健診プラザ

## 福岡県随一の健診センターでDXを推進 タブレット端末によるペーパーレス化で 健診の時間短縮・効率化・均てん化を実現

3公益法人が合併して誕生したふくおか公衆衛生推進機構は、旧健診施設を統合し「ガーデンシティ健診プラザ」をオープン。同施設は、各種健診システムとPACSを高度に連携させて、タブレット端末活用によるペーパーレス化と健診のDXを推進。健診時間及び受診者の待ち時間短縮や検査業務の効率化に加え、健診業務の可視化による健診の質の均てん化の実現に成功した。また、PACSへのAIによる画像診断支援システムの導入に加え、施設内に臨床検査室を設け、迅速かつ高精度の検査を実施する。同機構におけるIT化と健診業務のDX推進の具体的内容を、同機構のキーパーソン3氏、本田理事長、松浦センター長、石本施設健診部部長らに話を聞いた。(2024年3月5日取材)

ふくおか公衆衛生推進機構  
理事長

本田 浩氏に聞く

「ふくおか公衆衛生推進機構の沿革と概要からお聞かせください。」

本機構は、2020年11月、3つの公益法人が合併してできた組織です。3つの公益法人とは、1940年設立の結核予防会福岡県支部、九州産業衛生協会と日本対がん協会福岡県支部が2009年に合併して設立された福岡県すこやか健康事業団、1955年設立の福岡県公衆衛生協会です。

本機構の概要ですが、健康事業局、公益事業局、事務局より構成されています。健康事業局には診療部門をはじめ、施設健診部門、巡回健診部門、環境科学部門

診者の皆様の健康管理に従来以上に貢献できているのではないのでしょうか。また、福岡県様の新型コロナ感染症対策事業としての「ワクチン接種」委託機関としても、皆様の健康維持に協力できたことは、本人の喜びとすると幸いです。

タブレットには誘導支援システムと通過管理システムを搭載しており、次の検査の案内がタブレット端末に表示されるとともに、システム制御によって受診者の皆様の最短ルートで案内することから、健診時間の短縮に貢献しています。これは、スタッフからも高く評価されています。導入して半年が経過しましたが、他医療機関や施設からの問い合わせ、見学が相次ぎ、健診ソリューションが今後大いに普及していく実感をしています。

これまで、健診の受診者の皆様の健診当日の検査進捗状況の管理に関して、「紙」で運用していましたが、今回、健診施設の統合と新規オープンに伴い、受診者の皆様には「タブレット端末」を携行していただきながら健診を実施するようにしました。

このタブレットには、健診に必要な受診者の皆様の基本情報以外に、検査内容の説明や、簡単な検査結果の情報を閲覧できるようにしており、受診者の皆様からは好評を博しております。さらに、

タブレットには誘導支援システムと通過管理システムを搭載しており、次の検査の案内がタブレット端末に表示されるとともに、システム制御によって受診者の皆様の最短ルートで案内することから、健診時間の短縮に貢献しています。これは、スタッフからも高く評価されています。導入して半年が経過しましたが、他医療機関や施設からの問い合わせ、見学が相次ぎ、健診ソリューションが今後大いに普及していく実感をしています。

「高い質と安全性の確保」を推進しています。健診の実施のみならず、保健指導や2次健診への勧奨なども積極的に行っており、本法人が健診を担当した自治体様での精密検査受診率は、5大がんのいずれの領域でも高い値を示しています。この事実は、本機構職員の「国民の皆様への健康維持に貢献したい」という気持ちの現れであると思っています。

本機構では、更なる高みを目指して、IT化及びDXを推進し、時代に即した新しい健診事業を継続的に提供できるよう邁進していきます。その一例として、

本機構ではX線画像読影のためにPACSを従来より使用してきましたが、「ガーデンシティ健診プラザ」のオープンに合わせ、全国の健診機関に先駆けて胸部X線画像読影を支援するAIソフトウェアを導入しました。従来の専門医2名によるダブルチェック体制の読影にAI技術を加えたことで、より高精度な画像診断体制を構築しています。また、「ガーデンシティ健診プラザ」で

などがありますが、健診事業については、労働安全衛生法及び作業環境測定法に基づく健診と、地域住民の皆様のための自治体からの委託健診を実施しています。

また、公益事業局では、本機構が日本対がん協会・結核予防会・公衆衛生協会の福岡県支部を兼ねていることから、「がんへの正しい知識の普及や啓発」「がん研究助成事業」「結核をはじめとする感染症の予防と撲滅」「公衆衛生の向上」などを図り、「健康で文化的な国民生活の推進」への寄与を目指して、公衆衛生分野での代表的機関として活動しています。

「ガーデンシティ健診プラザ」を新たに設立されました。施設健診部門では、2023年7月に既存の2施設を統合して「ガーデンシティ健診プラザ」をオープンしました。

さらに重要なことは、受診者の皆様個別の禁忌事項が健診の現場で的確に把握でき、従来以上に安全な健診を提供できるようになっていることです。今後は、蓄積された健診に関する様々なデータを分析することで、運営上や経営上の課題を明確化させ、本施設が日々進歩していく上での強力なサポーターになると信じています。



ガーデンシティ健診プラザのメインエントランス。天井が高く、広々とした空間には大きな採光窓を設置して、リラックスできる空間を演出している。

おかげさまで多くの皆様にご利用いただき、同施設で健診を受けて良かったと、たくさんの方の感謝のお言葉を頂戴しております。

当初こそコロナ禍の影響による受診者数の減少を懸念していましたが、十分な感染対策を図り、受診者の皆様に安心安全な健診を提供する体制で臨んだことで影響を最小限に抑えることができ、受

### 本田 浩 (ほんだ・ひろし)氏

1979年九州大学医学部卒。1986年米国アイオワ大学放射線科 Assistant Professor。2002年九州大学医学研究院臨床放射線科学分野教授。2013年第72回日本放射線学会 会長、2014年日本医学放射線学会理事長、2018年日本ラジオロジー協会代表理事を歴任。2019年九州大学名誉教授、2022年公益財団法人ふくおか公衆衛生推進機構理事長、現在に至る。

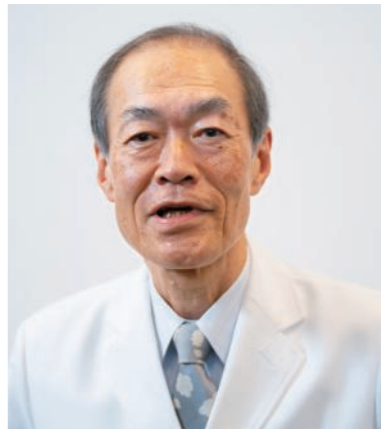
はCTを用いた検査も実施していますが、CT画像の読影にもAI技術を搭載したソフトウェアを活用しています。健診事業の今後としては、Web問診等による予約の簡略化、健診における受診者の皆様の待ち時間や検査時間の更なる短縮、健診結果報告の迅速化、積極的な保健指導等、常にアップデートされた健診事業を継続的に提供するように努めて参ります。

予防医療の領域では、保健指導がこれまで以上に注目されています。本年4月に改定された「第4期特定健診・特定保健指導」では、特定保健指導による成果を評価する「アウトカム評価」が導入されるようになり、取り組む健診機関での格差が生じてくるかもしれません。

本機構では、改訂された内容に合わせて体制を新たに整備し、「健康診断・健康増進」「疾病の早期発見・早期治療」「社会環境の保全」に積極的に取り組み、国民の健康と健やかな生活の維持に貢献できよう精進して参ります。

■ふくおか公衆衛生推進機構 ガーデンシティ健診プラザ  
**新施設オープンに伴って健診ソリューションによるDXを実施**  
**健診での待ち時間短縮・検査の効率化等を実現し好評博す**

ふくおか公衆衛生推進機構 常務理事  
 ガーデンシティ健診プラザセンター長  
**松浦 隆志氏**に聞く



**松浦 隆志** (まつうら・たかし)氏  
 1980年久留米大学医学部卒。九州大学医学部放射線科、産業医科大学病院放射線科、佐賀医科大学医学部放射線科、九州厚生年金病院、国家公務員共済組合連合会 浜の町病院等を経て、2019年公益財団法人福岡県すこやか健康事業団 福岡国際総合健診センター所長。2020年ふくおか公衆衛生推進機構 常務理事 健康事業局長、2023年7月より同法人ガーデンシティ健診プラザセンター長

が問題となっていたこともあり、2施設を1つに統合することにしたのです。そして、両施設のほぼ中間に位置する場所に最新のこのビルが建設されることになりました」  
 2つの異なる法人・施設を統合することに苦勞は多かったと松浦氏は述べた。

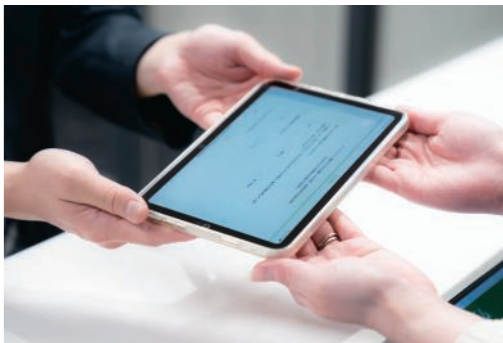
「2023年7月オープンの1年前から統合・移

転プロジェクトを進めましたが、統合する以前は、全く別の法人であったことから、健診業務の統一には苦勞しました。

また、先述のとおり、両施設とも古い施設であったためIT化が進んでいないことも多く、移転を契機に一挙にIT化を推進して効率的な健診の運用を行おうと考えたのです」

現在、同プラザのスタッフ数は、医師10名、事務職員25名、看護師及び保健師11名、臨床検査技師3名、診療放射線技師13名の計62名。IT化の推進の甲斐あって、受診者は統合以前より増えていると松浦氏は統合の効果を強調する。

「7月に統合したばかりなので2023年度の実績はまだ集計中ですが、同年度の



受付で手渡されるタブレット端末。受診者の基本情報はすでに入力されており、受診者は同端末に問診内容を入力。誘導支援システムにより、待ち時間を極力減らした健診を実現した。

受診者数は6万名を超えると思えます。2022年度の2施設の総受診者数は5万8520名でしたし、それに加え今年度は移転のために6月の1カ月間は業務をストップさせていたことを考えれば、かなりの受診者増を達成したと言えるのではないのでしょうか」

IT化による医療DX達成  
**健診ソリューションを多数導入し**  
**タブレットを用いた健診を実施**

オープンした「ガーデンシティ健診プラザ」における健診業務の特徴について、松浦氏はタブレットを活用した健診の実施を第一に挙げる。

「本プラザにおける健診の特徴としては、IT化に伴うタブレット健診を実施していることが挙げられます。

受診者が来られたらタブレット端末をお渡しし、受診者様自身の手で問診内容を入力して頂きます。それから、受診者様を誘導支援システムのサポートにより、次の検査の案内や検査場所に至る最短ルートの表示を行い誘導し、待ち時間



受付の窓口は旧施設の2カ所から7カ所に増設。タブレット端末による健診のスタート&ゴールとなる。



タブレット端末上の当日問診画面。簡単なタッチパネル操作で入力の簡便性を確保し、その情報はリアルタイムで検査の現場に送信される。



健診フロアの中待合室。健診衣に着替えた受診者はまずここに案内される。ここで血圧や視力の測定を行うことができる。

の短縮や検査の効率化を図りました。多くのペーパーレスによる健診を実施しているため、医療者側の負担も減り、また、健診での受診者様の滞在時間を短縮できたことで、より多くの受診者様の健診を実施できるようになりました。なお、本プラザは、午前で250名、午後で150名に及ぶ受診者様の健診を行います。これは従来施設の1.5倍の人数となっています」

同プラザでは、ペーパーレスによる健診を実施するため、アークテック社の健診ソリューションを多数導入している。その中核となるのがデータ収集システム「けんしんくん」だ。同システムは、主たる健診システムと連携して、通過管理やオーダ連携、各種検査装置からの検査結果取得、ME機器属性連携、各モダリティとのMWM連携を実現し、迅速な検査結

果取得と健診システムでのデータ収集を実現するものである。

この他にも、タブレット端末によるペーパーレス運用を実現するための入館システムや受付システム及び血圧問診システム、受診者の検査を効率よく実施するための誘導支援システムに加え、誘導支援システムと連動して健診現場の状況に応じて円滑な誘導サポートやオプション受診の勧奨、タブレットを通じての呼び出しサポートなどを行うコンシェルジュシステム等を導入している。先述のとおり、健診時間を短縮するだけでなく、タブレット端末上で受診者の呼び出しを行うため、プライバシー保護にも一役買っているという。

「受診者様の待ち時間や移動の問題を解決することにより健診時間が短縮されたことは、受診者様からの評価も高いですね。スタッフからも、お互いのセクションの連携が容易になり、検査の対応や精度が向上したとの声が出ています。今後は人間ドック等、個人の健診の集客を進めていきたいです」

施設健診部門と巡回健診部門  
**医用画像サーバの一元化を図り**  
**施設と巡回のデータを即座に参照**

同プラザでは健診で実施する胸部X線画像の読影にもAIを活用するなど、DXを推進している。

「年間6万件に及ぶ胸部X線画像の読影は2名の読影医によるダブルチェックを実施していますが、本プラザでは、それに加えてAIによる読影支援ソフトウェア

アによって読影漏れを防ぎ、より精度の高い画像診断を実現しています。また、CTによる肺がん検診や大腸がん検診なども実施していますが、肺がん検診に関してもAIによる読影支援ソフトウェアを導入して、読影業務をサポートさせています」

医用画像については、巡回健診に関する画像データと施設健診の画像データを一元管理しており、読影医が巡回健診に関する画像も迅速に読影することができるといいます。

また、健診データについても、施設健診は前出の「けんしんくん」、巡回健診のデータについては同じアークテック社のデータ収集システム「じゅんかいくん」の稼働によって、それらのデータの一元管理を実現している。

今後のIT化の展望  
**業務的な課題は予約システムの拡充**  
**Web予約などのIT化を更に促進**

順調に健診事業の実績を伸ばしている同プラザだが、まだ克服すべき課題もあると松浦氏は指摘する。

「受診者増に伴い、予約への対応に人手が足りない状況になってきています。電話予約が繋がらないといった問題も起こっており、今後はコールセンターを充実させるとともに、Web予約システムを導入するなどして対応していきたいです。

AIによる画像診断については、2024年度中に内視鏡のAIシステムを導入して、内視鏡検査に関する診断精度の向上を図りたいと考えています。

なお、2024年度から始まる第4期特定健診・特定保健指導では、アウトカム評価が重視され、受診者様とのコミュニケーションが重要となります。従来の電話や手紙による連絡は、働いている方々にとっては迷惑がられることも多いので、今後はITを駆使したチャット機能やメールの活用を促進すれば、保健師の負担も減る上に受診者様の利便性が高くなります。健診受診の動機付けを促し、結果、生活習慣病やがんの予防に貢献していきたいと考えています」



血圧・視力測定フロア。タブレット端末をセットすることで音声ガイドにより、受診者自らが血圧・視力を測定。結果はリアルタイムに収集され、データを保存する。



中待合室に隣接する採血スペース。健診フロアには臨床検査室が設けられており、迅速に検査結果のデータを出力することができる。

## ■ふくおか公衆衛生推進機構 健康事業局 IT化を推進してタブレット端末での健診のペーパーレス化を実現 検査結果のスピーディな通知や特定保健指導などの充実化を目指す

— Interview —

ふくおか公衆衛生推進機構 健康事業局  
施設健診部長

石本 裕二氏に聞く



石本 裕二 (いしもと・ゆうじ)氏

1991年近畿医療技術専門学校卒。鹿児島県済会南風病院を経て、2012年公益財団法人福岡県すこやか健康事業団に勤務。2016年同事業団福岡国際総合健診センター副センター長。2020年ふくおか公衆衛生推進機構 施設健診部長兼施設放射線課長、2024年4月より同法人 健康事業局施設健診部 部長、現在に至る。

必要があります。そこで、タブレット端末を利用したペーパーレス化に当たり、問診システムの構築に力を入れ、健診システムに各検査項目のデータを取り込むデータ収集システム「けんしんくん」を導入して、DXを推進したのです」

「実は、旧すこやか健康事業団の健診施設運営において、診察や採血などの各検査項目を受診者様が通過したことを記録する通過管理システムとして「けんしんくん」を採用していたのです。

当然、他メーカーのシステムも検討しましたが、『けんしんくん』にはオーダー連携や検査結果取得、ME機器属性連携やモダリティとのMWM連携が可能であるなど、新施設での運用を満足させるだけのポテンシャルをすでに有していましたし、旧施設での運用時におけるメーカー対応の評価も高いものでした。なお、本機構は施設健診だけでなく巡回健診も実施していますが、巡回健診に関するデータも一元化したいとの考えがありました。アークテック社には施設健診用の「けんしんくん」とは別に、巡回健診用の「じゅんかいくん」というシステムも上市しており、両システムを採用することにより施設・巡回健診のデータの一元化が図れ

ること、そして、既にあるシステムを拡張するだけで済むことからコストも抑制できる点などを評価し、採用に至りました」

### 健診業務のDX①

健診スタッフにインカムを装着させリアルタイムでの業務連携をサポート

基幹システムとなる健診システム及びPACSと共に、「けんしんくん」をはじめとする各種健診ソリューションの連携により、健診業務は大幅に効率化されたと石本氏は評価する。

「基幹システムには、施設スタッフが受診者に関する様々な個人情報を入力します。検査スタッフは、受診者に関する情報をシステムから素早く入手できるので、検査時の対応も予め準備することが可能になり、業務の効率化に繋がっています」

また、新たに受診者の誘導支援を行うために採用したコンシェルジュシステムの活用で、受診者の位置や健診フロアの場所に誘導しているかを把握することも可能となった。健診フロアのスタッフはインカムを装着しており、システムだけでなくスタッフ間のコミュニケーションによる情報共有も図っているという。「インカムについては、導入当初、スタッフから煩わしいといった声も聞かれましたが、スタッフ同士が連携できることによる効果も出ており、ネガティブな声は無くなってきていますね。また、インカムの会話を通して、業務に関するスタッフの理解度の深さも見えてくるので、スタッフの研修・育成にも繋がっていると



診察室では、各種健診ソリューション及びPACSを通じて、受診者に関する様々な情報を一元的に把握することができ、精度の高い診断を行うことができる。

「当施設内に臨床検査室を設けているので、血液検査の結果を即日データ化でき

ますし、画像診断もPACSによる読影機能を向上させていますので、翌日までにはレポートを作成できます。これらを含め、一般の定期健康診断であれば、受診翌日には健診の結果を出すことも可能になっています。この短時間での結果報告体制は、当機構のアピールポイントにしていくのではないのでしょうか。

また、タブレット端末には本法人の広報誌や雑誌等の電子書籍を搭載して、受診者に対するアメニティ向上を図る予定です」

データ取得の迅速性を生かして、新年度から始まる第4期特定保健指導にもシステムを活用したいとも加える。

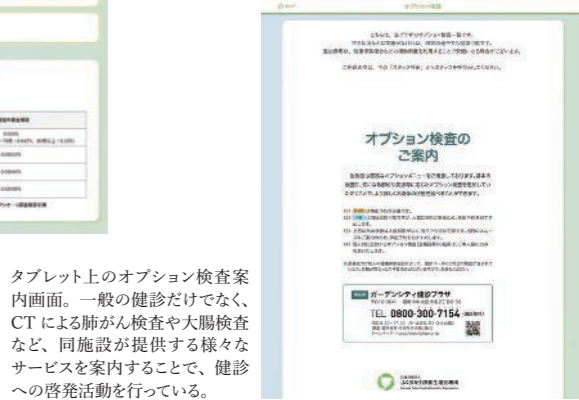
「当施設独自のシステムとして、リアルタイムによる特定保健指導の階層化判定を始めました。血液検査の結果は受診中でも得られるので、健診を受診している間

### 健診業務のDX② バックヤード側で時間管理を実現 健診の質の均てん化に貢献する

という効果もあります」



タブレット上の胃部X線検査の説明画面。受診者は検査に関する情報をタブレットで収集。各種検査に関する知識を共有することで検査時間の短縮に繋がっている。



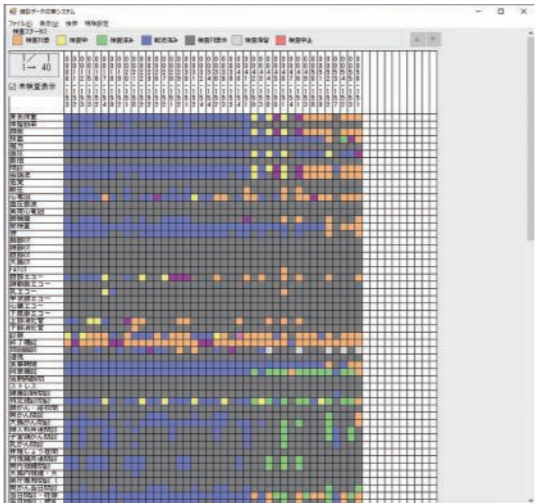
タブレット上のオプション検査案内画面。一般の健診だけでなく、CTによる肺がん検査や大腸検査など、同施設が提供する様々なサービスを案内することで、健診への啓発活動を行っている。

健診施設内の業務の流れのIT化で、新たに判明したことや成果について、石本氏は時間管理の有用性を強調する。

「健診に関する時間管理ができる点も新システムの評価点です。時間管理ができたことで、例えば問診や検査業務において、特に時間が掛かっているケースでは何が問題なのかを精査する契機となります。

時間の問題が顕著に出やすいのは、問診や超音波検査、胃のバリウム検査など

です。例えば、本来7〜8分程度で終わる検査に15分以上掛かってしまった場合、健診の長時間化だけでなく、受診者様に対して不快感や不安感を与えることになり、時間が掛かってしまった理由を突き詰め



「けんしんくん」上の全体進捗状況画面。検査に関わる時間管理も行えることで、検査の均てん化に向けた取り組みを支援する。



コンシェルジュシステムの画面。フロアの混雑状況を素早く把握し、検査順を組み換え受診者の誘導を支援。誘導状況がリアルタイムに通知されるため、検査ブース担当者との連携強化を図ることができる。

### システムの展望

健診データ取得の迅速性を生かして第4期特定保健指導の充実を目指す

システムの今後について、石本氏はつぎのように話す。